巻頭言　── 紀要特集号発刊に当たって ──

Preface to the Publication of Special Issue

田中　　一

本特集号の発刊に当たって，社会情報学部初代学部長の田中一先生からメッセージを頂きました．田中先生はその旺盛な探究心と指導力で創設期の学部を牽引され，日本で最初の社会情報学部の礎を築かれると同時に日本社会情報学会の創設も初代会長としてリードされました．以下は，編集委員の森田が聴き取ったものを起こした原稿です．もし，正確に内容を表現できていない部分があるとしたら，それは全て編集委員の責に帰するものです．

はじめに

社会情報学部が閉じるということを伺い，大変残念ではありますが，難しい分野に取り組んで来られた学部関係者の方々のご苦労に感謝の念を強くいたします．

社会情報学は，「これからは，一つの単一分野をそれぞれに研究を進めていくだけではなく，複数の分野を一つの分野として研究対象とすることも必要である」との考えから生まれたものです．したがって，今まで経験したことのない研究対象であるということにも社会情報学の難しさがあったかと思います．社会情報学の継続の難しさは，社会情報学がよく分かった上で，継続しないという判断が出たというよりは，「社会情報学が何だかよく分からなくて」ということで独自の研究を継続していくことが難しいという結果に繋がったかとも感じます．

この機会に，幾つか思うところを述べさせていただきたいと思います．

TANAKA Hajime　北海道大学名誉教授
（1997 年 3 月社会情報学部退職）

社会情報学の発展

まず，社会情報学の発展していく道について私が考えるところを述べさせていただきます．

社会情報学というのは，「物理」とか「化学」とかという独立した個別学問と違って，いろいろな情報の学が密接に関係する，関係せざるを得ないというところにその特長があります．そういう密接な関係の存在が，「物理の情報」，「化学の情報」のような個別の（体系的に閉じた）情報と違うところです．社会を構成している要素の構成の仕方が非常に密接であり，さらには不可分の関係にあり，したがって，〝つながり〟が必然的に重要であるというようなつながり方をしています．このように，社会では，その中で色々なものが不可分的につながっています．そういったものを対象にしようとした学問が社会情報学です．

この「つながり方」ということをキーワードとして社会情報学を捉えると，学問の可能性は，非常に広がって行くと感じています．社会を学問の対象とするのであれば，社会情

報学としてまとまらざるを得ないのではないかと思います．しかし，そのまとまり方を突き詰めて行くことは中々骨の折れることです．と言うのは，社会というものを対象としたときには，(上に述べましたように単一の分野の情報だけでは構成できないので）どのような分野のどのような概念をいかに組み合わせて行くかを考えねばならないからです．それは決して簡単なことではなく色々な角度から検討して行かなければならないでしょう．

そういう意味で，いつか誰かが音頭をとって，「社会情報とは何であるか」というテーマで自由に発言する場があるといいと思います．「俺はこう思う．」「私はこう思う．」と，自由に言えるところで，学問は発展します．私の経験では，自由な議論を通じて「あ，これはいいな」とひらめいた時には，それを掘り下げて考えると新しい，さらには発展的な内容を含んでいることが多いものです．潜在的な考察の蓄積がそういう形で発露するように思います．ですから，そのような刺激に常に身をさらし，新たに創るという立場で自らの考えを磨き上げて行くことが学問の発展には不可欠です．そうしなければ，既定の知識体系の枠組みに安住してしまい，やがて同じようなことの繰り返しという事態に陥りかねません．これは，どの学問分野にも当てはまることでしょうが，社会情報学のように，新しいあるいは学際的な学問では，そのような研究姿勢が特に強く求められるように思います．

私自身は，社会の中における様々な要素の「つながり方」あるいは「関係のあり方」については，内在性に基づいて結びついて行くという点に注目してはどうかと考えていますが，その辺の考えはまだまだ未完成で，ほんの一つの示唆に過ぎません．今後皆さんが社会情報学に関連して面白いと感じたことを，皆さんが最もやりやすい形で突き進めて行くことで，概念が整理され発展して行くものと期待しています．

教育と研究

この機会に免じてもう一つお話ししても宜しいでしょうか．それは教育についてです．大学を巡る情勢が厳しくなっている中で，恐らく，皆さんはかなりの労力を教育にかけ，研究との両立にも苦心されていることと思います．

そういった状況を理解しつつも，私は，研究者にとって〝教える〟ということは，自己の成長のために必要なことと感じています．ある研究テーマに，それが面白いと思ってのめり込むように取り組んでいる研究者が，その面白さを，例えその片鱗でも若い世代に伝える事は，教える側，教わる側双方にとって大きな意義があることだと思います．生き生きと取り組んでいるテーマがあること，そしてそれを独り善がりではなく，若い世代に伝えることは研究者でなければできません．もちろん，研究内容をそのまま伝える事は困難でしょうが，生き生きと研究テーマに取り組んでいる研究者から伝わるエネルギーや迫力というようなものは学生側にも伝わるものです．そうして，何かを探求するとはどういうことかを伝える側とそれを受け止める側で一種の共鳴が起きるところに大学教育の醍醐味があるように思います．私自身は教育とは共鳴だとずっと考えて来ました．そしてそれが，研究者が教育を行うという大学教育の意義であると思います．今後，色々な形での大学改革が進んで行っても，(今後も変わることがない）大学としての普遍的な存在意義であるように思います．

おわりに

今回の紀要特集号には，現在の学部スタッフの方のみではなく，かつて学部に在籍された多くの方が寄稿されています．学部 25 年間の〝つながり〟がこのような紀要特集号とい

う形で結実していることを大変頼もしくそして嬉しく思っています．また，その〝つながり〟の中に巻頭言として加わる機会を与えて下さったことに感謝しています．

社会情報学部におけるこのような〝つながり〟が，皆さんの置かれたそれぞれの環境でそれぞれの道を切り開くことにつながり，そしてそこで得られたものが，皆さんの教育・指導を通じて若い世代へ伝わって行くことを，そういう風にこの〝つながり〟が発展して行くことを心より願っています．